

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

和尚と天狗

佐藤家の昔話（十四）

編 武 田 正

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

和尚と天狗

佐藤家の昔話(十四)

編 武 田 正

和尚と天狗

佐藤家の昔話（十四）

1	短筒強盗と若者	5
2	赤い兎	7
3	金のぼんだら	9
4	蔵王権現と若衆	12
5	雨乞い	13
6	馬喰のはなし	14
7	仙術のソバマンジュウ	16
8	ほたる姫	19

9	和尚と天狗	
10	芝草	
11	釈迦のはなし	
12	姥捨	
13	麦畑	
14	底のない釣るべ	
	佐藤家の昔話採訪ノート	
	柳田国男の昔話観	
	武田	
	正	
20		30
22		28
23		26
23		24
23		23

佐藤家の昔話（十四）

和尚と天狗

1 短筒強盜と若者

たんづつ

536

むかしむかし、田舎から江戸さ行つて一生けんめい働いっただ若衆いだったつて。ところが、根がとつても真面目なもんだし、旦那がら大変重く用いらつてはあ、「掛け」とりまでさせられるようになった。

たまたまその頃、江戸には、短筒強盜というの居で、ほして、あの、今のピストルだな、ピストルつきつけて、掛けとりして来た金ねらうな、居だった。たまたま、その若者が掛けとりして、いっぱい金持て来たところが、向うから短筒つきつけらつて、

「これ、若い者待て、あり金、全部よこせ。よこさねど、この三連発が火を吹くぞ」

びっくりした。ほん時、ほれ、すばらしく機転の効くほの番頭なもんだから、「金はみな上げます。んだげんども、おれも田舎から出てきて、番頭にまでなつたんだから、只渡したんだら、旦那さ申し訳ない。その短筒、三連発で、いま言っ

たんだげんども、三連発で、この前掛けさ、孔あけてもらいたい」

「よし、んなら、今打って孔あける」

ボンと打った、一発。ボンと打った、二発。またボンと打った三発。

「あと、ないのがはあ」

「うん、三連発だから、あとない」

「このヤロウ！」

ていうど、いきなり今度あ、番頭の方が荒くなつて、三発打ってしまったがら、空えなつたわけだ。

ほうして格闘したら、田舎から出て来たから、力は強いべし、強盗ねじふせらつだつて。ほしてとうとう、ほの短筒強盗がお縄になつたつて。

どんぴんからりん、すっからりん。

2 赤い 兎

537

むがしむがし、兎と熊といで、兎が熊に追^ほわった。ほしてどういうわけだが、めったえ兎など追ったことのない熊なんだげんども、腹でも空^すいたがして、兎を追った。兎は、ほれ、追いつかれつど食れつどなんねどて逃げたげんども、熊の足が速くてとてもとても逃げられそうにないんで、道の脇の草むらさ入ってしまった。

ところが、先が行きどまりで、ないつたて分かんねがら、そこから急にもどつてみたら、熊ぶつ魂消て逃げて行つた。

「へえ、不思議なこともあるもんだ」

と思つて、来たらこんど、狼は逃げる、猿は逃げる、皆逃げる。逃げるばかりでなく平身低頭して頭さげでる。

「不思議なこともあるもんだ」

と思つたら、こんど、ほれ、猿なんか栗なんかドングリなんか、木の実なんか

もつてきて捧げる。

ところが、兎が入ったところは野いちご畑だった。野いちご畑さ急にとびこんだもんだから、体じゅうが真っ赤になった。赤い兎は神さまの使いて昔はいうたもんだって。ほんで神さまの使いが急に出はったもんだから、熊も猿も狼も、みな平身低頭して、いろいろなもの捧げた。

ところがその兎は何も知しやねで、

「おれは、すばらしく偉いものになったんだな」

と思つて、こういう風に、夏みたいになつて暑かくなつた頃、水浴びした。ほして、

「これこれ、猿、何か持つてこい」

て言うたら、猿は持つて来ねがったはあて、白い兎に返ったがら…。

「なに馬鹿語る。おまえ、只の兎だどれ」

て言^やつたで。結局、赤い兎というな、昔から神さまの使いだつて言^やつた時代あんなだど。

どんぴんからりん、すっからりん。

3 金のぼんだら

538

むかしむかし、この村に狩人を生業^{なりわい}として暮してゐる若者がいたのだ。

ところが、ここら周辺の山、蔵王の中腹まで、まず、くまなくどこも入ったことない、知しやね沢ないくらい歩いて、そして、ほれ、カモシカよ、ウサギよ、熊よて、いろいろ獲って、その毛皮なり、肉なりを売って生業にしてだ若者がいた。だけど。

ところがある時、入ったことのない沢さ入って見たところが、そこに洞窟があった。

「はあ、こんなどこに洞窟がある」

と思つて、ちよつと中さ入つてみたれば、そこあ、金のぼんだら（つらら）だつ

た。

「いや、これは大したもんだ。何もこだえてあくせく獣の尻追っかけていなくとも、これ一本持つてって売るんだら、一生食えるんだ」

と。ほしてはいっ取つて帰ろうと思つたら、白髪の老人がどっかどもなく現わつて来て、

「これこれ、若者。それを決してへワタクシ〜してならないぞ。取つてはいけない。もし、これを取るならば、お前の村で困っている者のために取るんだつたら許す。んでなかったら駄目だ」

て言わつた。神さまのような人に言わつたもんだから、ほれ、とにかくこの人あ神さまだ、この人の言うごと聞かねど、死ぬがもしんねというわけで、

「んでは、ちよつと申し上げますけども、うちの村で一番困つてんのは、カヤだ。屋根を葺くカヤがなくて困つてるんだが、ほのカヤを造成するために使つて、ななたべ」

て、伺い立てだんだど。

「それは結構だ」

て、まず家さ帰ってきて、庄屋さんいろいろ相談した。

「ほだえ、ええことあつこんだらば、そのぼんだら売って、まず殿さまから土地払い下げでもらって、カヤの造成する」

こういうわけで相談なつて、そしてそこさ行ってみたれば、やつぱり金のぼんだらが下がつておつた。それを頂戴して、そして殿さまから土地借りうけて、カヤ野を作つた。して、その若者の姓は〈滝沢〉て言うたつたつけ。んで今でも、ほこ「滝沢山」て、その人の名前とつていう。大滝沢、裏滝沢、表滝沢、ダイズ、チヨウシの口なて、いろいろある。またそこに百貫森という山もあつた。一日五十貫匁の鉾石掘つたどこは「五十貫山」、百貫匁の鉾石出たどこを百貫森山ていうたつて。

どんぴんからりん、すつからりん。

4 蔵王権現と若衆

539

むかしむかし、蔵王権現さまさ祈禱してもらいに行くために、若者だ、ほれ、七、八人して、ずうつと行つたれば、高湯街道で、七十才越えたような老人が杉の木、せつせど植えただけつて。

「なんだ、あのジサマ、七十才もなてがら、杉の木植えて、明日にもコロツと逝^いつたら何もなんねえべ」

こういうわけで、ほれ、若衆だ、からがつたんだど。

「じんつあ、じんつあ、今ごろから杉の木植えて、何なつどこだ」
て言^ゆつたつて。

ところが、ほのじんつあ、

「ああ、いや、実はな、おらえの家にも、ニシダ（お前たち）みだいなウスバカヤロベラ居たから、植えてで呉^けんのだ」

ていうたつて。はいつ聞いで、登山に行つた若者あ、

「なるほどなあ」

というわけで、二の句つげながつたど。

5 雨 乞 い

むかしむかし、日でり続いて、日でり続いて、何とも仕様ない。

んだもんだから、お社やしろさまだとかお明神さまとか、いろいろ神さまさ、笛、太鼓で、ほの、雨乞いした。したら、ますます照って、雨一つも降らね。

ほんで、占師さ行って聞いてみた。ところが、

「お前だ、笛、太鼓で雨乞いしてでは、分かんねっだな」

「なして」

「笛ざあ、ヒヨリヒヨリど鳴る。太鼓はテレツケテレツケと鳴るから、ヒヨリとテレツケでは雨降りようないんだ」

て言うたつて。んだから、雨乞いさは太鼓、笛は使わんねもんだつて、昔から
いうたけど。

どんぴんからりん、すつからりん。

6 馬喰のはなし

541

むかし、馬喰して、すばらしい産をなした人いだったて。その人が、まず、日
清戦争とか日露戦争とかで軍馬調達すつとき、ものすごく馬持つてで、政府さ高
く売つてもうがった。ほんでその人の馬の買い方に問題があつたつて。

どういう風にして馬買ったがていうと、農家の庭先さ行つて、毎朝行つて、

「馬見せてけらっしゃい」

て、馬見に行く。ほうすつど今まで活発に馬が尻尾おっぱふつていだな、ピターツと
尻尾動がねくなる。ほうすつどその馬喰曰く、

「これはデンピンという病気で、尻尾動かさねぐなたんだら、まず時間の問題だ。たちまち死んでしまうんだ」

んだどほれ、農家で、

「あららら、さきだまで一生懸命尻尾ふってだな、パターツと尻尾ふらねぐな。こりや馬のポックリ病みたいに来る病気だべがつす」

ていうど、

「いやいや、ほだほだ。デンピン、伝染性貧血症という病気だ。ほれさかかるんだらほあ、銭かけて捨てんなねくなるんだて」

「ほんでは、安いったてええから持つてつてけろ。何とかなんべがつす。お願いします」

ていう。まず銭つけて呉るみたいなもんだったど。

ほの、馬の尻尾動かさねぐする伝授があつたて。ほいつは何だかていうど、針、馬の尻尾さすつど、見せてけらしやいていうたとき、知しやねんたこめに（知らないでいるうちに）刺すんだつて。んだど、ほれ、馬が尻尾動かすたんび痛い

もんだから尻尾。パタツと動かさねくなるって。

「尻尾ふらねぐな馬は、とにかく分んねはあ」

ていうたて。ほうして安く買つては高く売ったもんだから、すばらしくもうげだつたて。

どんぴんからりん、すっからりん。

7 仙術のソバマンジユウ

542

むかしむかし、すばらしく美人で、その娘があやしいほどきれいな女で、そして旅籠経営しておった。

泊まり客がいつけんども、ほの泊まり客出たな見たことないんだど。ふしぎなこともあるもんだ。して、ほこにはほの、馬五、六頭つねにつながっておったど。

「おかしいこともあるもんだあ」

と思つて、ある人がほこき泊り行つて、様子を見つたら、夜中になつたら、ほの馬で内庭を馬鋤で代掻きする。

「ほう、水もないどこ代掻きなの始めだった。あと何故すんなだべか」

と思つて見つたら、そいっっちゃソバナの蒔き始めた。したら一晩のうちに、ソバ芽出して、花咲いで、実えなつた。はいつ挽き臼でひいで、ソバマンジュウ作つた。そしてそのソバマンジュウ、朝げ出す。お客さま、ほれ、ソバマンジュウなというな、昔は珍らしがったもんだから、

「こりや結構だ」

なて食うんだら、アハハハ、アハハハて、おがしくなつて、笑つたのがこんど、苦しくなたがと思ふど頭の耳あたりから馬になて来^くんなだど。

そして馬にさつて、みな売り飛ばさつてだ。

「ははあ、こういうことか、よし」

というわけで、その人が他さ行つて、ソバマンジュウ買つてきて、ほっからもらつたような、いかにも素振りして食べて、

「実は、わたしも、他からソバマンジュウもらってきた。お宅んなよりうまいかうまくないか、食ってみねが」

というわけで、その旅籠のおかみさ食せてみたど。ほうしたらたちまち旅籠のおかみもはあ、アハハハ、アハハハて笑つてたのが、こんど苦しくなつたと思つたらば、馬になつた。それさタテゴはめではあ、ちゃんとその人が乗馬に使つてだ。いや、言うこときいて、とてもええ馬だて。そしてあるとき野原まで行つたら、スウーッと空から仙人が来て、そこさ立つたけあ、その馬ば見っただけあ、そして馬、その仙人ば見たけあ、涙ぼろぼろこぼしたつて。

どういふことだべと思つたら、

「あれほど、おれが仙術を、悪い方に使うなつて、お前さ教えたはずだ。それをおれのいましめを破つて、単なるお金もうけに使うなて、もつての他だ。今回だけは元のまにもどしてやるげんども、後は絶対にはあ、もどしてやらないぞ」

て、こういう風に言わつたつて。ほして、元の、ほれ、娘にもどつたつて。そしてそれから、ほの馬さのつてきたお客さまと結婚したていふ話もあるし、そつ

からまずはあ、煙のごとく消えで行ったという話もあつし、そのさきは何だかわかんね。

どんぴんからりん、すっからりん。

8 ほたる姫

543

むかし、若い子どもだ、ホタル狩りに行った。

いやいや、スイスイ、スイスイ、ホタルとんでる。たくさんとって知らず知らずのうちに、みな子どもだ泣いっただはあて。家さ行かんねぐなつたはあて。したら、どっから子どもなく提灯さげっただ少女が来てね、

「わたしが案内してけっからて」

というわけで、

「んだから、こだえこっちまで、お前だ来んな」

ていうわけで、家さずうつと来て、家の前まで来たら、その提灯がパツと消え
だらば、ほの娘がホタルになつて、すうつと飛んで行つたつて。

「はあ、やつぱり、ホタルも生きもんだから、無理にホタルとつたりしねで、とつ
たたて、こりや皆かえして来んなねんだなあ」
て考えだつたて。

9 和尚と天狗

持念小僧も和尚さんになつたど。

そうすつど、何とか空をとびたいと、つねにこういうこと考えでおつたど。空
をとぶにはいろいろ考えてみたげんども、まず、天狗の羽団扇以外にないど。天
狗の羽団扇、なぜしてせしめつかど、ほういうこと、つねがね考えておつたてい
うんだな。そうすつど、天狗の住ま^すかいしてるという山さ、敵中深く入って行つ

て、ほしてほの、何とか天狗の羽団扇とってきたい。警戒が厳重で仲々入らんね。

「いや、困ったもんだ」

ていうもんで、ある時行つて、山中深く潜入しかがったわけだね。

ところが途中で天狗が話しておったていうんだ。天狗同士で。

天狗ていうのは非常に鼻高いから、匂いには敏感であり、音にも敏感であるげ
んども、若干視力に弱いどこあった。こういうわけで、人参で鼻作つて、面上手
に作つて、天狗の格好して、行つたれば、話し声がきこえるていうんだな。途中
まで行ったら〔葦酒山門に入るを許さず〕ていう立て札があつて、臭いものは大
嫌いだと、天狗は、それだけ匂いには敏感だど。

で、天狗は何か助平な話はすつけども、女にはかまわなかつたど。

ところで、語つてる言葉は、反対語だつたていうんだな。ほして天狗と天狗が
会うど、挨拶するていうわけだ。

「コノエノサマズ、ナイタリアコマンベナス」

て通つて行くていうのだな。持念はそいず紙書きいて、反対読んでみたら、な

んだ、天狗なて、反対語を言うていだんだ。こういうわけで、こんど、ほれ、「コンニチワ」の反対を言うたりして、天狗の根城近く潜入して行つたわけだ。ほうしたら羽団扇がずうっと掛つていた。それ持^たつてみたら、たちまちに天飛べるぐなつたていうんだな。

「いやいや、やつぱり天狗の羽団扇、大したもんだ」
て、そしてアハハ、アハハと喜んでいたら、揺りおこさつた。それが夢だつたていうわけなんだな。

10 芝

草

545

「明日休みだから、芝草、二背^{ふた}負いも刈つて休むんだ」

ていうわけで、前の晩、夕方一生けんめい、鎌砥いで、草刈り行ったらば、何だか草切んねて、刈つて来たつて。草切んねと思つたれば、暗いうち行つたがら、

挽き臼の柄たがって行つたんだってなで。

11 釈迦のはなし

546

お釈迦さまの弟子で、子どもをバリバリ食うな居だったど。

そして、子ども食ねように、ザクロの木植えさせで、ザクロ食べさせた。んだから今でも人の肉ていうな、ざくろの味がするていう。

その者の子どもの一人をお釈迦さまが隠してくれる。そうすつど、自分の子どもいねぐなつた悲しみていうな分かつて、それから人食ねぐなつたど。

12 姥 捨 — 満州で書いた話 —

六十才になつど、チャンチュウ飲ませで泥酔させで、蕃刀で首はねだんだそう
だ。そしてそれを焼いでしまつたもんだそうだ。

ある智恵のある若者が羊ば焼いで、こういう風に殺したていうて、かくすわけ
だ、年寄りば。そして羊の骨を見せるわけだ。

ところが、たまたま、隣の国から圧力かけらつで、「象がどつしりして落付い
でいつけんども、象をさわがせる動物がいるはずだ」。

そうしたれば、みんな、「虎だべ」の、何だのていうげんど、決して象は微動だ
もしながつたて。

ところが象ていうな、非常に神経質なもんだから、蟻コをもつて行くと、蟻コ
にぶつたまげて騒いだていうんだな。

ところがまた、ほれ、難題ふっかけらつた。「元、裏知んねような木もつて来て、
どっちがモトだか、どっちがウラだか、これを見分ける」て。

「そんなの簡単だ。川さ流せば、元の方が必ず重いんだ。んだから元の方が先になつて流れっから」

て、流してみたら、やっぱり向き変えても、向き変えても、元が先になつて流っだど。したれば、

「こだえ智慧のある国と戦争したら、かなわね」

というわけで、そこで和睦申し込んだど。そしてそれがどこでわかったがていうど、結局老人にきいだんだつたて。

13 麦

畑

548

適齡期の娘っだなね。

「この麦畑から、一番大きい麦をとりなさい、決して戻ることにはならん」

と、こういう風に言わつたど。ほしてこの娘が入ったら、最初大きなあるなあ

と思つて見でだつて。んだげんども、中さ行つたらまだ大きなあるんでないがな
あて、ずうつと行つてみだげんど、結局、最初見だなが一番大きい麦だつたという
ことで、人生もはいつと同じで、つれ合いになる人というのは、最初ええなあと
思つた人がええんであつて、

「まだええなあるんでないか、まだ大きなあるんでないか」
ていうてるうちに、ほの、年を腐らがすようになつからていうことを、いまし
めたていうことだど。

14 底のない釣るべ

549

ある旦那衆が嫁もらつたつて。ほこさ嫁に行つたれば、ほこの舅親父が、嫁さ
底のない釣るべで、

「かいつで、水汲みなさい」

ていうたつて。ほしてタライ、ほこさ置いて、「かいっちゃ汲みなさい」て。せつせ、せつせて汲んでみたげんど、一回こう上げてみても、ポタポタ、ポタしか落ちね、底ないんだから、何回汲んでも。んだげんども、ほれ、汲めて言っだもんだから、半日汲んでいだれば、舅さまがほこさ帰つてきて、

「汲んだか。ああよく汲んだ」
て。

「おまえが釣べの側（面）^{がわ}であるぞ、うちのせがれが底であるぞ。うちのせがれがなんぼ底抜けであつたて、お前がみっちりしていれば、これだけの水が溜めることできるんだ。んだから、ゆめゆめ、粗ろうのないように、お前がしっかりしてくれれば……」

ていうことを、水汲みでさとしたていう話聞いたことあつた。

佐藤家の昔話採訪ノート

急に思い立って、佐藤孝一氏に無理を強いてお邪魔したのは、七月九日の昼すぎであつた。気象台始まって以来の暑さという言葉も耳についているその頃であつたが、なるほど暑く、じつと坐つていても体に汗が吹き出すようであつた。倉座敷といわれる部屋がよかろうと、裏手の座敷に案内された。忘れもしない、最初に孝一氏から話を聞いたのがこの部屋で、昔はマユの取引をした部屋でもあり、西側から入る光は黄金に輝くような感じで、「ここで取引した生糸の値はいつもよかつた。この倉が生糸の値を高くした」などと言つていたそうである。

久しぶりの孝一氏は数年前の病氣も癒えて、すこぶる元気に、軍隊生活で満州にいた頃の思い出話も持ち出してくれた。こんな雑談の合間に、昔話についていくつかの貴重な話も出されたので、そのいくつかを記してみたい。

幼時にあつた福聚寺（「ほらの吹く蔵、嘘の語郎」の寺）のお逮夜に、民話めいた話を「法話」ということで聞いたものだが、現在の浄久寺になつてもそうであつ

たという。浄久寺は真宗の五門徒で、上山の法円寺、山形の片谷地の寺、沼木の寺、沢（上山）の寺の和尚も来て法話をしてくれるものだったという。大変おもしろい法話で、みんな楽しみにしていたものだったという。和尚さまはさつとお経を上げた後に説教をしてくれ、「虎猫の恩返し」などは説教として聞いたもの。またお釈迦さまの話などもそうであったという。お逮夜は十一月の末頃だったと記憶している。

満州に兵隊で行った頃、朝鮮の北方、朝鮮の日本海側を汽車で行ったが、あちこちに龍宮城のような寺があり、「浦島」の源流がこんなところにあるのではないかと思ったことがある。また加藤清正の話などをその地方の人から聞いたこともあり、親近感を抱いたものという。満州では語り手を「ソハ大人」といつていたが、佐藤氏が「あなたは日本のソハ大人だ」と言われたことがあるという。そんな中で、満州の「姥捨」を聞いたという。

榎下あたりでの若衆話の中の艶話を「大黒話」とも呼んでいた。大黒様の嫁としての股大根などから出来た言葉なのかどうか。

柳田国男の昔話観

武田 正

(一) 昔話採集の意味

柳田国男が昔話に関心を示しはじめるのは、三十五才の時の遠野旅行からかも知れない。

明治四十三年、三十六才の時に名著『遠野物語』が上梓され、「お伽話のことを昔々と言ふ。ヤマハハの話最も多くあり、ヤマハハは山姥のことなるべし。」『遠野物語』一一五」と記し、続いて三話の山姥譚を記している。しかし当時は伝説についての考察をもっぱらとし、「伝説の系統及び分類」をはじめ、「生石伝説」「塚と森の話」「十三塚の分布及其伝説」などから『山島民譚集』、さらに「夜啼石の話」「曾我兄弟の墳墓」「甲賀三郎」などの問題を、次々に発表して、旅行と官員としての生活、そして大正十一年に朝日新聞論説委員として官員生活を終え

るまで、多忙な生活を送っている。

大正十二年に自宅で民俗学に関する第一回談話会を開催したところから、今迄の旅旅行などを通して体験したことをまとめて、名著『海南小記』がまとめられたのは大正も末の十四年のことである。

昔話の研究の急務を説いた最初の論文があらわれたのは、大正十五年の「吉右会記事（原題「昔話の新しい姿」^①）」であった。九州大分県の吉右衛門にまつわる話は、豊前や中津川では吉吾話となり、熊本の彦市や彦七話ともなり、奥州における吉次、吉六、吉内話などにさえ、その影を落していると指摘している。

こうした地域において昔話調査収集に当たっている人々との交流などから、昔話がどんな意味をもち、なぜ採集されねばならないのかを明確にしたのは、昭和三年の「昔話解説」^②であった。その中で、採集の理由を三つ上げている。

「其一つは親が小さい者の為に説かうとする動機が（中略）是だけは是非とも大きくなる迄の間に、覚え込ませて置かねばならぬ」ことであり、第二には、「小児が成人の事業に加入しようとする要求が、現在の集合教育の始まる以前は、遙か

に今よりも強烈に且つ早期であつたこと、是は決して模倣の一面に止まらず、又色々の生活方法の選択の上にも現れて居る」という。そして第三には、「前代の共同団体に於て、児童に課せられたる分担事務の可なり重要なものであつたこと」としてゐる。

続いて、柳田は「話術」の重要性を次のように指摘していることは大いに注目しておく必要がある。

「琵琶法師を題とした笑話やからかいの歌も相応に多い。亦同様に彼徒の自作であらうと思ふ。平家は如何にも物悲しい語り物であるが、座頭に随従する小盲は、跡で口直しのやうに、腹を抱へさせるような早物語をした。東北地方で大家といふ程の家は、台所が馬鹿に大きくて、始終色々の旅の者が泊まっていた。ボサマなどは殊に人氣があつて、芸と話で夜は遅くまで遊ぶのが習ひであつた。」

物悲しい語り物と笑いを含んだ早物語のコントラストの妙は、語りを聞く聞き手に絶妙な喜びを味合わせたにちがいない。また下手な説教に泣に比丘尼を傭つたという語り手の配慮が、あるいは「相槌」を生み出した一つの原因かも知れな

いという指摘も、昔話の本質を見きわめる際の重要なポイントの一つと考えられる。ともかくそういった語り手が、重要視したのは、「各々特徴ある語り口を以て、次々に新しい形の昔話を増加したこと」^③であろうという。

柳田の昔話に対する見方が、「語り」というものを重視したことは、昭和四年の「はて無し話」^④にも明瞭である。長崎のねずみと薩摩のねずみがひどい飢饉でそれぞれ舟にのり、不知火の海で出会い、双方の話をし合って悲嘆して、一匹ずつ海にとびこむ。そのときの語り口は、

〈チュウチュウと泣いてドンブリと海に飛び込む〉

という口調が、「チュウドンブリ」という面白い言葉として聞き手の耳に残り、「児童は其歴史の片端を語って聴かされて居たのである。」という。また櫛の樹かドングリの落ちる話では、「田栗の実が一粒ずつ落ちて、サハリと笹の枝を渡って、石垣の石にカチリと当たり、それから水の中へドブン」という果てなし話を取り上げ、「昔話は大昔からずっと引き続いて、所望せられてするものにきまつて居た。子供が際限も無く話をねだるといふのも、実は彼等が話し手にとって、最も大事

な信者であり、又最も忠実なる門下生であることを意味したのである。」^⑤（傍点筆者）として、昔話が語り手と聞き手の双方によつて成立する「語り」物であることに注目している。また「果てなし話」には語りの芸能化が見られるという指摘も、結びの句が近世にいたつて笑いを含む長い句になつたり、「形式譚」といわれる一連の「結びの句」に連結して行く昔話の一群が、きわめて芸能的色彩をもっている点に注目すべきである。形式譚がしばしば「歌語り」に近い語り口をもっていることは、多くの調査者の指摘しているところであり、中には昔話そのものを「歌語り」として語る話者も発見されている。^⑥

（二）昔話の伝播

ここで柳田は全国に同系の昔話が散在することについて、昔話がどう運搬されたかに注目する。今日「家系伝承」といわれるものが、どんな風に昔話を豊かに

したかを次のように記している。

「日本のお婆さんは百の八十人までがその家で育った人で無い。嫁に来てから覚えた話もたまにはあらうが、嫁には屈託があつて、そんな事にかかつて居られない。だから大部分は箆箆長持と共に親里から運んできたものである。即ち昔話もまた隣村隣郡と縁組をして居たのである。」^⑦

といいながら、歴史的にふり返ると、座頭の果たした昔話運搬の役割を高く評価して、各所で取り上げている。

「日本前代の説話輸送業者のうちで、特に歴史的なるものは座頭であつた。記録にもその痕跡はほぼ認められるが、なお自分は別に説話それ自体からもこの事実を証出することが出来ると思つて居る。」^⑧

としているが、その他にも祭文語り、瞽女、いたこなどによる伝播が指摘され、さらには「お伽の者」の語りへの影響を次のようにいう。

「大名小名の同朋衆又は御伽の者といふ群で、純然たる口と耳との奉公をして居た者は彼等のみであつた。盲が旅行を盛んにすることもまた日本だけの特徴とい

ふべきで、戦国時代にはしばしばこれを探偵細作の役に利用して居たといふのも、つまりはこの連中が耳も至って鋭く、聴いた話は必ずその急所をつかんで、他日人に語ることを能くしたからであつた。彼らの集つて来る中心は方々にあつたが、少なくとも京都には何ヶ所かの昔話交換所があつた。」^⑨

なるほど、上山市榎下の五四九話（現在）の話者たる佐藤孝一氏、『とーびんと』の話者故工藤六兵衛氏などの記憶法は、まさに、昔話または「語り」の急所をどう自分のものにするかに腐心したことを教えてくれる。^⑩柳田の御伽の者の指摘は桑田忠親の『大名と御伽衆』^⑪などの研究を生むことになったと見ることができであろう。

ただここで注意したいのは、「昔話の運搬と整理」の中で、昔話の管理について、次のように述べる部分である。

「短い言葉でいふと、昔話の現存には三つの力の結合が必要であつた。一つには保管者としての女性、二つには輸送者たる諸種の職人、三つにはその機会を作つた成人の群であつた。」

というが、聞き手の語りへの要求は欠落してしまっている。昔話はもちろん子供だけを対象にして語られたものではなく、歴史をさかのぼればさかのぼるほど聞き手は子供であるよりは成人に達した人々であつたろうから、そのことをさしこよう記したと見るべきなのかも知れない。

昭和五年は柳田の昔話研究の最も記念すべき年であつた。この年の一月に『桃太郎の誕生』に巻頭を飾る、しかもそれが単行本の表題にもなる「桃太郎の誕生」^⑫が書かれ、昭和七年まで書き継がれることになる。国内にある種々の昔話を集めてみると、種々の問題があるということを、一種のおどろきに似た目で書いたともいえる書きぶりである。ヨーロッパのシンデレラ姫と日本の「糠福・米福」が同型の昔話であるといったことについても、「実は其頃まではまだ私などもさう大きな問題とも思つて居なかつたのである」と述懐し、「此研究（昔話の）の後半だけは是非とも志を同じうする何人かに引き継いで置く必要がある。私が強いてこの不完全なる研究を発表するのも、本願は是より他にない」（一）内筆者）という文の中には、柳田の押さえた興奮のようなものを見ることができるようになる。

れる。

多くの問題点の指摘の中から、柳田の問題意識をさぐってみると、「神話から昔話へ」の移り動きを理解することにあるように見える。

「幼少な者が、笑ひそぞろいて聴く猿轡入のをどけた話から、遠くは三輪山箸墓の伝説と、筋の続きを認められる敬虔な或旧家の宿語りまで、現に其進化の中間の十数段階が、地を接して同時に併存して居るのである」とし、「兔に角是（神話）から伝説と民間説話へ移り動いて往った足取りだけは見られる」（一）内筆者）といい、昔話の成長・変化を三つに押さえている。

(一)「説話が上代に於いて夙く芸術化し、そのやや成熟した形に於いて弘く流传して居たもの、たとへば死人感謝譚（「歌う骸骨」）や紅皿欠皿話。」

(二)「説話の信仰上の基礎が全く崩壊せず、従つて之を支持した伝説は素より、その正式の語りごとが尚幽かながら残つて居たもの、たとへば蛇轡入の如き、一部の異類求婚譚。」

(三)最後に説話が近世に入つて急に成熟し、元の樹の所在は不明になったが、ま

だ其果実の新鮮味を失はぬもの、たとへば桃太郎、瓜子姫説話の類。」

その上に、「語り」がこれらの説話を受け継いで来たということを指摘する。

「子供だけが聴衆だと考へる時に、用語を解し易くするよりは固より、更に又叙述の省略と敷衍とが行はれたことである。話術は元来がさういう風に、いつも聴衆の顔色によつて影響を受けるものであつた。」

(三) 昔話と固有信仰

柳田の主たる関心事は「固有信仰の片鱗としての昔話」ということであつた。

それを見事に分析してわれわれの前に開陳して見せてくれたのが、「海神少童」^⑬

であつた。靈童譚の持つ妖怪性と水神信仰が織りなす物語性は本格昔話の持つ、

必要のある全てを具有しているといえよう。その上に神話との関係を最も端的に伺わせるものを持つために、すでに笑話化してしまっている靈童譚の中にさえ神

話との関連を見る資料がはまり込んで残されていると見ることが出来るからである。「将来の神話学」とした「神神少童」の最終章で、熱っぽく日本の昔話の特殊性と固有信仰の問題を取り上げる。

「我々の昔話に対する深い興味は、主として其分布が何を語るかを知らうとするに在る。従つて經典から訳され、説教聖に学ばれて、支那天竺から来たといふだけならば、特に事新しく立証して貫はずともよいのである。（中略）日本に伝はつたものだけは著しく型が違つて居る。少なくとも或る特殊の部分が異常に行き進んで居る。たとへば小児の誕生を水の神の靈威に託するといふだけの信仰ならば偶合であれ、はた伝播であれ、異なる多くの民族にも共通であつたらう。ただ日本は海の国、さうして又山川のたぎち流るる国であつたが故に、海には「うつぼ舟」の漂着した話、川には瓜子姫、桃太郎の話などが、他には類の無い発達をしたのである。」

こう記した上に、日本の村落社会の現実には、「外部からの刺衝の少なかった日本の田舎などでは存外に近い頃まで其痕跡（神話の）を保存して居たといふこと

は、外国にはまだ知らぬ人も多いのである。場処や時刻や話し手の条件を完備せぬ故に、之を純然たる神話とは区別せねばなるまいが、少なくとも説話が一種の宗教力を以て、支持し伝承せられて居た時代は新しかった。」といった、昔話研究にすぐれた条件のあることを指摘する。「竜宮女房」から説き起こし、機織池、機織瀬などの伝説、東北各地に聞かれるザシキワラシ、中世の小冊子類にあらわれた心得童子とか如意童子、「浦島太郎」などまで一連の「小さ子ばなし」の数々は水神信仰と深いかわりをもった説話であつたことが、ここで解き明かされる。

今日なお田舎で語り継がれている昔話が、遠い昔から今日まで、どういう系譜をもつて語り継がれてきたかという、あまりに大きな課題、特に今日の昔話をどう原型に向つて遡及しうるかといふことができるかという課題を、逆に捉えるために、何が語りを変えて行くかにも目をくばりはじめる。「瓜子織姫」^④の中で、信仰の衰頹と語りの変質を論じている。

「桃太郎と瓜子姫と、二つの昔話を比べ合わせて見ると、双方一致して居るのは、前半分だけで、是から後は丸で行き方が違つて居るやうに見えるが、此相違は果

たして最初からのものか、それとも童話になってからの傾向が追々にそれを著しくしたかといふことは可なり私たちには大切な問題である。(中略)力を入れようとした部分が双方同じで無かつた為に、愈々変化が甚だしくなつたことは確かであるが、尚其以外にも生活習慣の推移と、背後の思想的信仰の發達とによつて、話をする者自身が先づこの二つの話の、一致共通に心付かなくなつてしまつたのである。」

という。「瓜子姫が大きくなつて機を織るのが上手であつたこと、若しくは毎日機を織つて居たこと、それからアマノジャクが窺ひ寄つた時に一人でちやうど戸をしめて機を織つて居たこと」のどれかを語り手がえらぶその意味を考えている。そして柳田は昔話の不変部分と可変部分について考へて行くことの必要を指摘する。さらにはアマノジャクは〈天之探女〉から〈山彦〉あるいは〈山父〉と関係があるのではないかという論を展開する。聞き手の問題が「語り」とどう関わつていたかということは残念ながら、説かれてはいないが、語り手の「語り」については、「世間話の研究」^⑮でも、「歴史的、即ち世の中の進みがどうしても説話の

新技術を成立せしめずには置かなかったこと」であつたとし、もつぱら長い歴史的な社会変動をもつて「語り」に最も大きな影響を与えたものと見ようとしている。

昔話の構造的な面から見れば、神話から昔話へという経路を見ることができ、昔話の「語り」という面から見ると、ハナシから昔話へ、有識者階層から、庶民（常民？）階層へという形をとつたものであらう。一般公衆のジャーナリストイックな興味の持ち方は、昔話を下品で滑稽なものへ近づけて行くことを指摘し、それが芸能化ということとも深くかわつていることを、『聴耳草紙』に寄せた柳田の一文が明瞭に示している。

「ボサマは人を喜ばせるのが職務だから、ある程度までの繰り返しを重ねると、今度は意外な作りかへ、もしくは後日譚の方へ出て行かうとする真面目であつた話をやや下品な滑稽へ持つて行かうとする。」¹⁶

続々と全国の昔話資料が柳田の手元に送られてくる昭和五年、六年の中で、『桃太郎の誕生』の中に、後にまとめられる「狼と鍛冶屋の姥」、「米倉法師」が書き

継がれている。その中で、説話の伝説化を取り上げており、説話の伝説化を支えたものが、「人と神霊」の仲介を業とした者によつて各地に運搬されたことに理由があるという指摘は、あるいは折口信夫の「まれびと」論と重なるものなのかどうか、時代設定が不明ではあるが、今もつて瞽女宿、祭文語りの宿などでは彼らが遊芸人であるということを、田舎者とても知らぬことはないのに、「まれびと」として来ることを待っていたことは明らかで、瞽女歌を蚕に聞かせて、よいマユを作らせるとか、瞽女のもらい集めた五十軒米とか百軒米を分けてもらい、それを御飯に炊き込めば幼な子がよく育つといったり、古い三味線の糸の切れ端とか、頭陀袋の古いものなどは、子育てあるいは安産の呪物とも言われて、子供の着物の端に縫いつけるなどという風習があることから十分納得ができる。^⑪

柳田がこういった昔話の移動と盲僧などの関係に対する関心は、単に昔話の伝播の問題だけでなしに、盲僧自体の持つ民俗学的問題にまで渉るものなのだろう。だから、昔話と盲僧の問題を取り上げた初めは、すでに昭和三年の「昔話解説」であるが、昭和七年七月に発表された「米倉法師」の中でも、再び次のように言っ

ている。

「私が此頃問題にして居るのは、何故に盲が日本の中世に於いて、斯様にまで活発に文芸に働きかけることになったかという点が一つ。是には瞽女と座頭との知能境界の相違を区分して考へて見なければならぬが、大体に信仰は彼等の最初の庇護者であつたのみならず、又彼等を支援し激励して、その隠れたる才分を発揮させた様である。」^⑧

この持続的な問題意識は、「信仰から文芸へ」という方向へ行くことになる。昭和七年から昭和十一年に断続的に書かれた『口承文芸史考』^⑨におさめられた諸論考がそれを示している。文芸としての昔話を取り上げられて、改めて文芸の中の昔話の立場を「私などの見た所では、二種の文芸（耳からの文芸と書かれた文芸）の最も動かない境目は、今いふ読者層と作者との関係、即ち作者を取り囲む看客なり、聴衆なりの群が、その文芸の産出に干与するか否かに在るやうに思う。」として、聞き手の「耳の文芸」へのかかわり合いの指摘は極めて重要なことである。

(四) 昔話の分類と昔話観

昔話を文芸として見る段になって、柳田の関心は昔話の分類に集中してくる。このことは当然のことであろう。最終的には昭和二十三年の『日本昔話名彙』^②によつて完成するが、関敬吾の『日本の昔話——比較研究序説——』^②で、柳田の方法を次のように指摘する。

「昭和五年、柳田が児童用に編集した『日本昔話集』が最初ではなからうか。昔話をほぼ三種類に分け、アアルネと同じく動物昔話、本格昔話、笑話の順に配列してある。後に『日本昔話名彙』におけるように、構造的、歴史的立場から、本格Ⅱ完形昔話（複合形式）、小話Ⅱ派生昔話（単一形式）の二分法に変わった。」とし、二分類にした基本的な柳田の発想を、「完形昔話の基本的内容は主人公の生涯を、派生昔話はあるときある日の事件が中心として語るものだ」と規定されている。」という。即ち関敬吾に言わせれば、構造的、歴史的ということであり、内的には信仰の生きていた時代のものを受け継いでいるものと、文芸あるいは芸能と

しての昔話に分類したと見ることができであろう。外形から押さえる立場のアルネの分類案には、柳田自身が批評を加え、それを取らないという発言からも、それをうかがえるように思われる。「聞き手」の年齢及び文芸学的な面からすれば、アルネの分類の方がより普及していることも考えさせられることの一つである。分類その他に残された問題も多いが、昭和十一年の「昔話を愛する人に」^②に柳田の昔話蒐集の意味がまとめて論じられている。その中から昔話観を示すものを拾い上げて要約すれば、次のようになるのではないか。

① 昔話は娯楽の一つであり、同時に教育でもあった。
② 固有の考え方が昔話の中に見られ、殊に無名の平民や女子小児の内部生活などまでが含まれている。

③ 日本人の趣味、感覚及び文芸能力がある。

④ 上代の信仰の片鱗が見られる。

⑤ 「語り」は方言研究の手段となる。

最後のものは、昔話の意味とは無関係であるが、昔話の「語り」が、柳田の昔

話蒐集の意図には入っていなかったことを示しているのではないかと思わせる口ぶりである。単なる方言研究の手段ではないものが「語り」にはあるように思われるからである。しかしこの事は柳田が改めて『日本昔話名彙』の巻頭にのせた「昔話のこと」で論ずることになる。名彙自体が「語り」そのものと無縁の著作であつたから、逆に「語り」について触れざるを得なかったのかも知れない。

「昔話の伝承にも二通りありまして、一つは此等の旅して歩く人々（座頭、巫女、旅芸人）が持ち伝へたものですが、この方には臭味ともいふべきものがあつて、すぐ判ります。もう一つは家庭内での伝承で、祖父母から孫子に伝へられる話は長い間には家庭化してしまふでせうが、きめが細くなつて、先のものと比較しますと、恰も織物の機械織と手織との差の様に、二つの間には大きなちがいが出来ました。即ち利用者の側からの選択が働いて居るのであります。

この問題を考へる為に、私は今一つ新しい目安を設けて居ります。即ち話手が敏感で、聴手の要望に応へようとするので、昔話の聴手が子供の時には話はあどけなく、山の中舟の上などで男の大人ばかりを相手にするには、あくどく下品な

ものに随して行く様に、需要者側の希望が当然にあらはれて来るのであります。私は是を指して読者の文芸能力といふ言葉を使つて居りますが、昔話の場合などは語りの一回一回に変へて行くことも出来るのであります。この問題を考への中に容れずに、ただ同じ国だから、地続きだからと大ざっぱなことは謂へないのであります。」⁽²³⁾

といつて、細かい地域の昔話分布の調査の必要を説いている。特に読者の文芸能力は「語り」と深いかわりがあるう。

(五) 今後の課題 — むすびに代えて —

昔話は語り手と聞き手が納得して、一つの新しい小宇宙を創造することでもあった。しかも語り手は芸人ではなく、祖母であり祖父である家庭の人々である。もちろん文芸的な意味においてであるが、語り手と聞き手を結ぶものは、相槌で

あった。名彙には、「子供の相槌に、サソという語を挟む。相槌を打つことを、「サソ継ぐ」といい、(中略)話が気に入らぬ時は「サソヘソデベソ」などと言って話を目茶目茶にしてしまう。」^②という指摘はこの事を意識して言ったことにちがいないが、相槌の「語り」の中での意味はまだ十分に捉えられていたとは言いがたかったのではないか。「オット(相槌)」と言わないと、あと聞かせないぞ」といった相槌の意味である。

また昔話は民間に伝承された説話の中で、耳で聞くものであることは、あまりに常識的すぎることはあるが、それが盲僧とか瞽女や祭文語りなどの芸能ではなしに、言ってみれば素人芸として伝承されたという、あまりにも自明な点に大きな問題が残されたと見なければならぬ。伝承の中心があくまで家系伝承であり、家系伝承の秘密を姉家督という点から、主婦権の移譲なども、昔話の本質に迫る課題の一つであろう。^③もちろん、昔話が今日的形態をとるまでに、昔話の「語り」に影響を与えたものは、一体どんなものであるかは細密に検討されねばならない。神話から昔話が生成するに当って、寺社縁起譚^④を無視する訳にはいかな

いのは当然ながら、寺社縁起を語ってくれた高僧の語り口の影響も十分に配慮する必要があるうし、それを受けての庚申の夜とか念仏講、日待ち、月待ちの話上手の語り口なども忘れるわけには行かない。さらには、神話から昔話へという単線的に昔話が出来てきたというよりは、複合的にいろいろな語りを吸収して昔話が生成したと見る必要のあることは、世間話をはじめ、民間に芽生え、他の芸能などからも「語り」が吸収したのも多いと思われるからである。²⁷⁾

語り上手といえば若衆小屋などでの一口話、渡り職人たる大工、屋根葺き、壁塗り、木地の塗師などから、農村における箕売り、笠売りをはじめ、山国におけるイサバ売り、薬売り、馬喰なども伝播にはかなり大きい役割を担っていたであろうことが次第に明らかにされている。²⁸⁾しかし、柳田がすでに指摘している遊芸人である盲僧、瞽女、いたこ、祭文語りなどについても実証的な研究が必要であることは論をまたない。²⁹⁾さらには村の溜まり場としての鍛冶屋とか問屋における「寄席ぶち」での伝播などにも目を配る必要があると考えられる。³⁰⁾

昔話の世界性が国内外の真摯な研究者によって云々されるようになった昨今で

あり、比較民俗学の方法をもつてヨーロッパの神話や昔話と日本のそれを見て行こうとすることも可能になりつつある時代に入ったが、日本の昔話の「語り」の中に最初に語る昔話、最後に語る昔話のあることの指摘などを通して、^⑨昔話の世界が単に一つ一つの昔話の比較から、昔話世界とでもいえる小宇宙的世界があるということになれば、自ら神話的世界の構造的把握と同様のことが、昔話に考えられる必要があるというべきである。^⑩それにつけても、柳田が昭和十七年「全国昔話記録趣意書」^⑪で、記録の目的を、「昔話の起源、どうしてこの特色多き一種の口碑だけが、遠く数千年前の埃及、印度を始めとし、古今東西のあらゆる諸民族に行き渡り、しかもその相互の間に数多い類似をもつかといふことであるが、是は現在の人智を以てしては、実はまだ解けない問題であつて、其為には今まで得られなかつた新資料と、新たな角度からの観察とが、何物よりも痛切に要望されて居る。」と記し、現在の資料でこの問題が解けるかという危惧の念をもつて趣意書を提出しているが、資料の蒐集が進みつつある現在においても、性急に結論づけることの危険性は変わりがない。柳田の意見を十分尊重しながら、ようやく

昔話研究は第二の段階に足を踏み入れたところであると考えられる。

註

- ① 「吉右会記事」(『定本柳田国男集』巻7)に「東京では自分が發起人の一人と為って、吉右衛門会といふ珍しい名称の、至って真面目なる学会が創立せられた」と記している。
- ② 「昔話解説」(『定本、巻6』)
- ③ 前掲書 五〇七頁
- ④ 「はて無し話」(『定本、巻6』)
- ⑤ 前掲書 三一〇頁
- ⑥ 拙稿「昔話伝承における「形式譚」」(『昔話の伝承と伝播』置賜民俗学会刊、昭51)参照。なお「歌語り」については小国町舟渡の塚原名右衛門氏の「牛方と山姥」の語りもあり、青森県下での昔話の歌語りもあるやに聞いている。

⑦ 「昔話の運搬と整理」(『定本、巻23』四三頁。野村純一「吹谷松兵衛昔話集」解説参照。

⑧ 「昔話の運搬と整理」前掲書 四四頁

⑨ 前掲書 四三頁

⑩ 『とーびんと』拙編（同刊行会、昭46）の「ある伝承者」参照。

⑪ 『大名と御伽衆』桑田忠親（増補新版、昭44、有精堂）

⑫⑬⑭ 『桃太郎の誕生』所収（『定本、巻8』。「桃太郎の誕生」は昭和5年1月。「海

神少童」は昭5年4月。「瓜子織姫」は昭5年5月。「狼と鍛冶屋の姥」は昭6年10月。

「米倉法師」は昭7年7月に発表されていることに注目したい。

⑮ 「世間話の研究」（『定本、巻7』）三八八頁

⑯ 「聴耳草紙」（『定本、23巻』）四八頁

⑰ 「瞽女の民間信仰」鈴木昭英（『日本民俗学』85号所収）。その他にも奥村幸雄氏よ

り教示された。

⑱ 前掲書「米倉法師」 二八九頁

⑲ 『口承文芸史考』（『定本、巻6』）

⑳ 『日本昔話名彙』（日本放送出版協会、昭23）以下「名彙」と略す。

②① 『日本の昔話』関敬吾著（日本放送出版協会、昭52）二五一頁

②② 『昔話を愛する人に』（『定本、巻8』）

②③ 前掲書 四八三頁

②④ 『名彙』三四〇頁。なお、佐藤孝一氏の教示によれば「そんな話、見たことも聞いたこともない」と繰り返して中断させる例もあり、子供との「語り」のかかわりを論じた拙稿「民話と発達観」（『国民教育』30号所収）も参照いただきたい。

②⑤ 『萩野才兵衛昔話集』野村純一稿（昭45）、『五分次郎』野村純一編（昭46、桜楓社刊）参照。

②⑥ 「寺社縁起から御伽話へ」五来重（『文字』昭51年9月号所収）。「僧侶と昔話の「語り」」拙稿（『農村文化』一号、昭53年）参照。

②⑦ 「世間話研究の課題」大島建彦著（『咄の伝承』岩崎美術社、昭45所収）

②⑧ 『木小屋話―置賜の昔話』拙著（桜楓社、昭46）解説参照。

②⑨ 『贅女の語る昔話』岩瀬博編（三弥井書店、昭50）。『贅女のごめんなんしよ昔』水沢謙一編（講談社、昭51）。『陸奥二戸の昔話』丸山久子・佐藤良裕編（三弥井書店、

昭48)、『蒜山盆地の昔話』稲田浩二、福田晃編(三弥井書店、昭43)など参照。

③0 「佐藤家の昔話」拙稿(『日本民俗学』91号、昭48)

③1 「最初に語る昔話」野村純一(『国学院雑誌』68巻2号)。「とりの話小考」稲田浩二(『伝承文学研究』十一号)。「昔話伝承における〈形式譚〉」(前掲書)参照。

③2 「神霊の変装と人間の変装」「怪物退治と異類婚姻」小松和彦(『神々の精神史』伝統と現代社、昭53、所収)、『酒吞童子異聞』佐竹昭広著(平凡社、昭52)。その他君島久子の諸論などを参照されたい。

③3 「全国昔話記録趣意書」(『定本、巻30』)

本稿は「柳田国男の昔話観と『語り』」(『山形の民話』35号、昭53・7)を改稿執筆したものであることをおこたわります。

和尚と天狗

佐藤家の昔話(十四)

発行

昭和五十三年八月十五日

編者

武田 正

南陽市赤湯三一八〇の四

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

和尚と天狗 佐藤家の昔話(十四)

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十三年十二月二十日

東北文教大学短期大学部民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

東北文教大学・同短期大学部附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

- 『西川町の昔話』(一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊)
『むかしあつたけど』(一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊)
『米沢市築沢の昔話』(一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
『米沢市塩井の昔話』(一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
『安楽城の伝承(一)』(一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊)
『安楽城の伝承(二)』(一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊)
『安楽城の伝承(三)』(一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊)
『高畠町和田の昔話』(一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
『及位の昔話(一)』(一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
『及位の昔話(四)』(一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊)
『及位の昔話(五)』(一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊)
『佐兵ばなし』(一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊)
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話(一)』(一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊)
『かつぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』(一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊)
『行けざんざん 小国町昔話集』(一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊)
『お婆の手ん箱(一) 阿部キヌオさんの語り』(一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊)
『及位の昔話(二)』(一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊)
『及位の昔話(三)』(一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊)

- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集―大平・新沼・高畑―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』
(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』(一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『ちようじやのむこ』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(上)』(一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(下)』(一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『木小屋の生活 民話序説』(一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』(一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『川崎みさをさんの昔話』(一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊)

『なら梨とり 赤湯の昔話』(一九六七年一月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(一) 民話のこころ(対談) 浜田広介先生と海老名ちやうさん』

(一九七一年四月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(二) 海老名ちやう昔話補遺』

(一九七一年八月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『たかみねと秋田の昔話』(一九七八年二月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『佐藤家の昔話(一) 山形県上山市榎下』(一九七二年七月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鳥吞爺 佐藤家の昔話(二)』(一九七二年九月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鉢かつぎ姫 佐藤家の昔話(三)』(一九七二年十二月発行、二〇一〇年七月再刊)

『天とひばり 佐藤家の昔話(四)』(一九七三年三月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『へらへら話 佐藤家の昔話(五)』(一九七三年七月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『夢のほたる 佐藤家の昔話(六)』(一九七三年十一月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『ぬるくす男 佐藤家の昔話(七)』(一九七四年十月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『蛤姫(上)(下) 佐藤家の昔話(八)』(一九七五年四月発行、二〇一一年七月再刊)

『おとぎり草 佐藤家の昔話(九)』(一九七五年七月発行、二〇一一年七月再刊)

『ゆき女 佐藤家の昔話(十)』(一九七六年二月発行、二〇一一年七月再刊)

『ねずみの角力とり 佐藤家の昔話(十一)』(一九七六年七月発行、二〇一一年十二月再刊)

『かみなが姫 佐藤家の昔話(十二)』(一九七六年十一月発行、二〇一一年十二月再刊)

『山鳥むかし 佐藤家の昔話(十三)』(一九七七年九月発行、二〇一一年十二月再刊)

『和尚と天狗 佐藤家の昔話(十四)』(一九七八年八月発行、二〇一一年十二月再刊)

『竜宮童子 佐藤家の昔話（十五）』（一九八〇年一月発行、二〇一一年十二月再刊）